
つらこど〜黒〜

上見祐二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つらこど〜黒〜

【Nコード】

N 6 7 3 8 A

【作者名】

上見祐二

【あらすじ】

その学校に彼はいた。全校生徒は彼がいつも通るとされる通学路を避け、先公も彼と廊下ですれ違うのを嫌う。彼は無敵の不良だった。自分が力を振るえば誰もが屈すると信じていた。しかし、そんな彼にも、どうしてもかなわないものが確かに存在した。それは……。——つらいこどもの青い青春を不良視点で描いたラブレス(?) コメディ、ここに青くも登場! …… 小説欄の《》内の数字は、マジ：ギャグの比です。(当社比)

ブローグ・喧嘩前のひととき。あっとすくーるがーでん（前書き）

注・稚拙です。みなさん、戻るキーの準備を怠らないでください。

ブローグ：喧嘩前のひととき。あつとすくーるがーでん

小さく、可愛らしく、可憐に萌ゆるクローバー達を春が咲いたような満面のにやけ顔で眺める少年。

肌の内側にまで染みてくるような陽気を生む空の巨大な恒星が昇って数時間が経つ。

暦の上でも春が顔を出したこの地球上の日本という国の中、クローバーを摘み取り、目の前でくりくりと回し始めた少年。彼は黒茶色の地面に敷き詰められた緑の絨毯の上に寝転がって微笑み続けた。

都会のと真ん中にあるにしては緑が豊かなこの少年が通う学校は、春の陽気に沈黙する。

率直に言ってしまうえば、ただ春休みの真っ只中だというだけだ。

桜の木がもう数日も経てば花を咲かすだろうというほどに蕾をつけ、次の世代の一年生の希望を抱え込んでいる。

少年はその春の花が咲いた数日後に行なわれるであろう始業式で晴れて二年生となる。

先程から何度も『少年』と表現しているが、そろそろ飽きてきた。というより、苦しくなってきた。

見た感じからして、すでに少年という淡くも切ない代名詞が使

える様相ではなく、どちらかというと青年、いや、おっさんである。

「おい小画山^{コガヤマ}…。その格好、何の真似だ？最近流行のニューカマーか？」

俺が、自分の世界にどっぷり浸かり転げて起き上がらなくなつた‘元’少年小画山の背中に言葉を落としてやると、彼はそのにやけ顔のまま俺のほうに振り向いてくれた。口に左手人差し指をくわえ、右手でクローバー、しかも四つ葉のものを軽快に回し続けるその姿は、うん、天下のグルメリポーターでも

「気持ち悪さの郵政民生化やゝ！」
以外の言葉で形容できないだろう。

「おいおいゝ、このポーズが分からないとは時代遅れだぞ黒田晴人^{ハルヒト}！」

「そこで何故上下両方の名前を言つんだよお前は…」

俺が見下ろしている奴の顔はニキビで少しぶつぶつで、髪の毛は春風に靡かないほど短く、逆立っている。ガタイも悪くなく、中学時代は野球をしていたそうだ。

そんな彼は、

「今週号の激撃マガジンの表紙の綾本唯ちゃんのポーズそのまんま

「じゃねえか！」

ただ今、現代文化の成果を余すことなく取り込み住む場所をすつぱりと変えてしまった人種、所謂オタクというものをナリワイとしている。

「はっ。またそんな下らねえ雑誌かよ」

「下らない…？」

小画山はゆつくり、ゆらりと立ち上がると、二度、三度と引き笑いをして良い感じに力が抜けた体さばきで残像を見せるがごとく揺れる。

「くだらない！？下らない！？クダナイ！？よくそんなことを…
…ん？ほほう、そうか、黒田、お前の魂胆が分かったぞ」

小画山の瞳が怪しげな輝きを放つ。俺はその嫌々な視線光線の直撃を受け、少し額に汗してしまった。

「な…なんだよ」

「お前…ツンデレキャラを目指しているんだろ!？」

……数分後、そこには小画山の、無残にもゴミのように気遣われることなく痛め付けられた肉体が転がっていたという。誰がやったかは定かではない。ただ、その場に居合わせた黒田氏はこう語る。

「小画山…哀れな男だぜ。生まれてきさえいなければ死にはしなかったのに…」

…とまあ、ふざけるのはここまでにしよう。

俺は小画山のふざけた台詞（つまり俺がツンデレキャラを目指しているという馬鹿げた言葉）を聞いた瞬間に小画山の腰に華麗な逆回し蹴りを放った。なんとまあ悪いことに、もともと腰に持病ギックリ腰を患っていた小画山はあっけなくその場に転げ、ひいひい悲鳴を上げながら腰を押さえのたうち回りだしてしまった。

「な…情け容赦無しかよ!？」

「お前にはな」

小画山はクローバーの葉っぱ達をまるで麵を作るために小麦粉でも練っているような体使いで荒らす。苦痛で顔を歪ませる。なんとも痛快だ。

「ぐう……、流石は噂名高い悪党だな…黒田！」

小画山が必死にひねり出した言葉は、俺以外誰もいない校庭に響いた。

「校内一の不良にして我が親友、黒田晴人よ！」

俺は静かに俯き、春風に靡く髪をゆっくりかきあげ唇を閉じ、沈黙した。

頭の中で、『校内一の不良』という言葉が何度もこだました。

主要キャラの説明会

主人公兼任語り人

・黒田 晴人

クロダ ハルヒト

どこにでもいそうな首筋が隠れるほど黒髪を伸ばした平凡児。高校ではやりわりの日常を未だ見ぬ彼女ともしつぱり送ろうと夢を見ている。

…というのは彼の頭の中だけの設定。

実際は周囲の生徒から彼がメンチを切れば地獄の仏も裸足で逃げ出すと言われるほどの通った不良さん。

先生は基本的に呼び捨てにし、また父親も然り。

実は学力優秀で、通い始めて二年になる高校はかなりの進学校だという。

突如降臨した謎の少女

・紅葉 菖蒲

モミジ アヤメ

かつてこの学校にはこんな伝説があった。黒髪長髪ツインテールの彼女、菖蒲を見た者は誰もが口からこう漏らしたと。

「な…なんて美しいんだ！」

という、でたらめにもほどがあるようなことが本気で起きそうなほどの和風美少女、それが彼女紅葉菖蒲。晴人のクラスで毎朝一番に登校してくる、等の忠実な性格と、落ち着いたその雰囲気から周囲の注目を一点に集める地味屋さん。しかしそんな彼女にも、もちろんおかしな秘密があつて…

晴人の友達

・小画山 哲也

コガヤマ テツヤ

OTAKU。

不良高の不良

・千道 輝鮫

センドウ キサメ

只今警察から大人気、『極道グループ千道組』の副組長の息子。見た目はいかつく、おそろしいが、晴人に叩き売った喧嘩は全て拳で叩き返された。とりあえず、所謂番長格を得ている。ちなみに晴人とは別の学校の生徒。

謎深き保健医

・向日葵 揚羽

ヒマワリ

アゲハ

小画山が週1で通う首都病院の医者。ちよくちよく晴人達の学校に姿を現すが、その正体は定かではなかったりする。

流れ惚ける春の日?・・・〈8:2〉

桜花びら舞い散る。

春風の運んできた花卉の淡紅色の落とし物が鼻先をかすめる。またそれは髪に捉まって離れなかったりもする。

咲き乱れる春。

まるでキャンパスに描かれた空想上の桜並木をそのままここに再現したかのごとき見事なまでの桜木配置に、通学路はまさに春真っ盛り、薄紅色の始まりの季節を祝っている。

少し勾配があり、足に掛かる負担が多少気になるが最早慣れたものだ。

学校指定の鞆はいまいち整理機能に乏しく、教材一式を詰め込むにあたわない。そのため、常に別の鞆を俺は持ち歩く。紐の長いビニールのスポーツバッグだ。しかしそれは野球部等が持つような重々しいものではなく、片手で担げる程の、体育用靴入れを少し大きくしたような感じの物だ。

それにより少し異様な登校姿を公に呈す俺だが、近くを通る生徒諸君は俺を見ようとはしない。

むしろ、避ける。

目を逸らす。

走って逃げる。

前に述べたうちの三つ目が実際に経験した時、俺は正直言つところ、完全に落胆と自己嫌悪、不安、葛藤、その他もろもろの精神的参った状態たちに囲まれそのど真ん中にいた。

誰にこの気持ちがかかるだろうか。

こちらからすれば名も顔も、ましてや存在すら知らない連中から、明らかに避けられ、裏口を叩かれているのだ。

そして今日、昨年度の三学期より急激に減ったそれらの赤の他人生徒がまた増加の一途を辿ることとなる。

始業式だ。

「黒田ーっ！おはおは、ようっ！ー！」

「やけにハイテンションだな小画山。また何かの即売会とやらがあつたのか？」

「鋭い！鋭すぎるよ兄ちゃん！！！」

春休み明け、即ち新クラス発表の日。

二年生最初の仕事は、自分のクラス部屋番号探しであつた。

体育館の入り口の前に壁一面を覆い尽くすほど大きな掲示板が貼られ、そこにクラス部屋番号が書き並べられていた。

朝遅くに登校したため、かなりの熱気を見せた現場だったが、思いの外随分楽にチェックすることができた。

そう、その場でも俺への敬遠現象が起きたのである。

機嫌ベクトルは下向きに一直線、その距離、大きさをのばしていった。

そして極め付けがこれである。

「おうおう！『H O・ヘドロキソ』っていうパソゲーの発売日だぜよ。そう、今日がな！これはな、発売半年前から絵士に藤井寺さんを起用したことにより話題となり、さらにその美麗CGは各メディアの度胆を抜くー」

なんたらかんたら。

この、延々と自分の世界に陶醉し続けている男とまた同じクラスになってしまったのだ。図らずも悶えそうだ。

二年普通科四組。それが新たな俺のクラスとなった。なんとも微妙だなオイ。

教室は耳にうるさい奇声や大きな笑い声が満ちに満ち、落ち着きのひとかけられない。しかしながら時計の針はすでにHR開始時間を過ぎていたわけで…

ガラガラ。

「はいっ、起立！」

と、先生が来ることは目に見えていたのである。慌てて自分の席に走り戻る女生徒達を待つて、先生に号令をかけるように合図をもらった最前列のとある生徒が礼の掛け声を掛ける。

退屈の巣窟、始業式当日のホー・ムルー・ムの始まりである。

流れ惚ける春の日。？・・・〈8:2〉

「みなさん、おはようございます。今日からこのクラスの担任となつた堀良木です」
クラギ

不快な予感を連れ教室に入ってきたのは、まだ肌寒さを感じるこ
とさえある四月の初めの季節だというのに額に脂汗を滲ませている
ほのかに小太り気味の中年男教師だった。

微妙にパーマがかつた不清潔な髪は何か整髪剤のようなもので固
められ蛍光灯の真つすぐな直光を反射している。

俺の脳はこういった時に意に反してフル稼働してしまう。

向かい来るものの全てを跳ね返しそうな腹の脂肪に、力チ力チのナ
イスヘッド。それらを総集して、奴の二つ名、即ち『あだ名』とい
うものを俺の頭は瞬時に創造し、組み立て、構築する。

結果、

「アイアンヘッド」

という案が出た。自己評価、五点満点中三点。

「お、出た！黒田の妙技、初対面者のあだ名付け！」

最後列の俺の席の丁度前に座っていた小画山が俺のお株を奪うよ
うにはきはきとそう言つと、周囲の他の生徒が潜み笑いを浮かべ、
クスクスと小声を立てた。

「何を笑っている、そこ！」

新担任に指を差されてまで注意された彼らは瞬時にして姿勢を正し、顔を真つすぐ前に向け、真面目人の表情を見せた。

俺は変わることなく、椅子を後ろに傾け、丁度45度ほどの角度を震央に揺れる運動を超スローペースで繰り返す。

だって、姿勢を正せなどと言われてはいやしないじゃないか。

「おい、おまえ。一番後ろの男！注意されたらしゃんとしろ！」

お門違いだ。今さっき、注意したのか、お前は。

「注意なんてされてないっすよ」

「しただろ？なのになんだその態度は？新学年早々問題を起こす気か！？」

アイアンヘッドは出席簿を手に取り、ページをぺらぺらと捲り始めた。数回動作を繰り返したのちに、あるページを開いてそのページにボールペンのキャップを挟んだ。

「お前の名前は…と」

どうやら席順と出席簿の出席番号を照らし合わせ、俺の個人を確定しようとしているらしかった。

しかし、先公の動作は一瞬、凍り付いた。表情が険しいものとなり、額の汗を少し拭いた。唇を二度舐め、その後にぱたんと出席簿を閉じた。

「ほ…ホームルームを終わる。各自解散してよろしい。では、起立」

先程まで俺が注意され沈み暗くなっていたクラスの雰囲気、先公の奇怪な言動により困惑の声を伴いに変わってしまった。

先公はすぐに教室から逃げるように退室した。

俺の名前を確認して、彼は逃げてしまったのだ。恐らくは。

無論、俺は先公の言葉に素直に甘え、教室をいそいそと後にした。俺が教室から出た瞬間、教室から廊下へ漏れ出す生徒の情声が一二人分ほど大きくなった。

昨年の例に習い、俺が通る道筋は綺麗だった。本当に、綺麗だった。

流れ惚ける春の日?・・・《9:1》

♪

廊下は新学期独特の騒々しい活気に満ちていた。女子は両手を取り合って同クラス入りを喜び、男子は肩を組んで少し弱い加減に殴り合っている。

俺は一直線の廊下を果てまで進み、一度右折する。職員室前の廊下へ出る。

紺色のブレザーの下のカッターシャツの第1ボタンを止め直す。私用の鞆はくちやくちやに丸めて脇の下に挟んでおく。

お呼び出しの電話をもらったのは丁度昨日の今頃だった。

家の電話に出たのは親父で詳しいことは俺にははっきりとは分からないが、きっと例の件である。

話は一週間前の日曜日にまで遡る。

その日はやけに気持ちの良い快晴の空で、朝からの気分も上々だった。

四月の風に足を奪われ、俺はふらふらと早朝の町という一風変わった回廊へと入り込んでいった。

ここからは説明するも易い。近所の朝帰り不良達に絡まれたのである。

彼らは近所の工業高校の二年生で、仕付けが悪いと有名な駄犬だった。

俺を見るやいなや殴りかかり、俺に反撃アッパーパンチをくらったのである。全員同じフィニッシュブローで片づけたので記憶に新しい事件だ。

だが後が悪かった。早朝パトロールの警察、犬のお巡りさんに吠えられ、連行されたのである。

もう説明はいるまい。つまり、喧嘩の始末を俺に伝え俺を罰し、何としても学校評価を上げたい教師連中が躍起になっているというわけである。

俺は生徒用の古ぼけた教室とは明らかに手のかけ方が違う軽金属製の引き扉を片手で少し開けた。その隙間に右足を差し込み、その

まま扉をスライドさせる。

入り口付近にいたオバサン教師に紫の視線で睨まれたが、軽く無視をして俺を呼び出した先公の所在を伺う。

その生徒指導の先公は教員室の最奥隅にあるいつもの机にどっしりと座り、扇子で自身に風を送り涼んでいた。

「来たか、黒田」

そりゃくるさ。あなたに反抗したら懲戒処分を避けられはしないということはあるからな。

「何の用だよ……っすか」

「先週の早朝に起きた傷害事件のことだ」

俺の周りに他の職員が集まりだした。恐らく俺が暴れだした時にその横暴を止めるために待機しているのだろう。

「停学かよ……ですか？」

「そうだったらこちらとしては良かったんだがな。お前が殴った少年の内の一人の母親がその子の学校の校長と教頭まで連れて謝罪にいらしたんでな、お前の懲戒処分を取り止めると頼み込んだん

だ。だから、停学は免れたよ」

「そっか。で、用はそれだけかよ」

「いや、もう一つ。さすがにこの件については校長先生もお前に少し腹を立てていてな。これから一週間、罰則を与えることになった」

腹が立ち、俺は重い調子で、チツ、と一つ舌打ちをした。同時に辺りの先公の視線が小難しいものとなり、面面向かう生徒指導の先生の表情も淀んで曇った。

「…で、何しろってんだよ」

「毎朝七時登校の上、花壇の整理、花壇周辺の雑草除去だそうだ」

「冗談じゃない、とこぼしそうになったが辛うじて言葉を飲み込む。俺が静かに一度頷くと、辺りの先公達はまるで雲散霧消がごとく消え去っていった。

「じゃ、俺帰りますんで」

「ああ、忘れるんじゃないぞ」

やつのことで家に帰る切符の切り落とし部分を切り取り終え、俺は昼前の明るい通学路へとただ一人、両手を腰ばきズボンのポケットに突っ込んで進みだした。

流れ惚ける春の日?・・・〈7:3〉

町はビル群が並び立つ高層主義建築地帯。太陽の、おふくろさんが子供を優しく抱擁するような柔かな光はそのビルのガラス鏡に反射し、きらきらと地上に降り注ぐ。

この国の中心とされるこの都市のスクランブル道路に通る車の交通量はNot a few、少ないわけではない。咳が出、鼻がツーンとするほど煙たい道が俺の通学路である。

学校を出て国道に向けずんずん進んでゆき、大きな道に出たら左折する。右手に見えますは近所で最近ブームのフラフープダイエツト発祥の聖地、木下ダンス教室。

さらに奥、正面に見えますが最近脱税で捕まった有名弁護士のご住まい。小画山がそこに自ら編成した^{ヒキガエル}幕軍3部隊を侵攻させたのは確か一年の夏の明けだったか。

俺はその弁護士邸に突き当たるまで進み、T字分路を左折。

いつもの帰り道だ。

だが、残念ながらどのモンスターとも会わずに次の町へ辿り着ける勇者などいなかった。

いや、俺は勇者とは対極にいる存在だったか。そんなことはどう

でもいい、とにかく、低確立ランダムエンカウトが発生したのである。

「また会ったなあ！宮寺高、番長、黒田晴人！」

健康そうな劇的なまでに鋭い眉毛に、髪型は完全オールバックの毒々しいフォルム。眼光は研ぎ澄まされ、地に飢えた獣が如し。

「はあ……またお前かよメンドウ」

「千道だっ！！貴様、竜虎の仲の好敵手の名も覚えられないのか！？」

「あだ名だ、あだ名。っていうかなんでこんなところを彷徨ってるんだよお前は」

「はっはっはっ。貴様を待っていたんだ、黒田番長！」

「まんまストーカーじゃねーか」

「ノン！ここであつたが百年目、今日こそ積年の決着を……ふぐっ！」

千道の腹のど真ん中、みぞおちの最下層に俺の鉄拳がめり込んだ。崩れるように倒れゆく千道。今日の活躍時間およそ二分。

「いい加減諦めろよな。そうでなきゃ律儀に一人で来ないで、仲間誘って不意打ちでも仕掛けてくりやいいじゃねーか。てめーの親父さんあたりでも連れてこいよ」

それでも俺の勝利は揺るぎないものだが。

千道の家は所謂『極道』の人たちの集会所で、建物は和風の豪邸庭付きとなんともイメージ通り。とはいってもそれほど大きい団体じゃなく、最近暴力行為がバレニュースになり知名度はあるのだが、実際に力はそれほどないのである。

「お…男は黙ってワンフォーセル…一対一で正々堂々だ……」

お腹を両手で抱え、痛みに顔を歪ませ、それでも強がり吐くその姿勢は驚愕に値する。が、さすがに奴の台詞は暑苦しい。いやそういうより、現代においてなんて馬鹿馬鹿しいアイデンティティを掲げているんだ、と茶化をいれたくなる。

「こちとら忙しいんだ。じゃあな、千道」

「ま…まで」

「なんだよメンドウ」

「お…お前最近夜中に出歩いて…不良を殴り倒して回ってないか？」

「いや。俺は毎日十一時には床に着く良い子ちゃんだからな」

「そうか…」

「なんだ？何かあったのか？」

俺は腰を下ろし、這いつくばる千道の髪の毛を掴む。オールバックが見事にばさばさになり、俺の手にかなりのヌメリ感のある液体がこびり付いた。

「さ…最近、夜な夜な不良を狩っては狩り、狩っては狩りを繰り返す変な奴が現われたらしいんだ」

「変な奴？」

「ああ…。なんでも、長髪でグラサンをかけた、いかつくも背の低い奴らしいんだ…」

「ふうん。知ったこつちやねーな」

俺は手をぱつと放し、千道の頭を落下させる。顎を打った奴が悶えていたことは気にしないでこつ。

腰を上げた俺は少しの遅れを取り戻すべく、帰宅への道を急いだ。

背後から感じる邪悪な負け犬の視線を感じながらも、俺は足を止めない。

少し進むと、どこからか、小鼻の先に春先の甘い香が迷い込んできた。

足を止めて辺りを見渡すと、道の右手側のわりかし大きな西洋風民家の庭にそれに似合うほど絢爛な桜の花が咲き誇っていた。

だが、驚いたのはそれからだ。

玄関格子からかすかに見える視界の中に、魔可不思議な花が咲き、その香を辺りに漂わせていたのだ。

「なんで春に菖蒲が咲いてるんだ？」

流れ惚ける春の日?・・・《10:0》

♪

灰色の町を抜け、少し都心から離れたところまで歩み出る。

学校から歩いて十五分、やっと俺の家がその姿を俺の面前に呈す。恐ろしいほど都会離れた霧囲気を持つ区域で、幾多の細道が複雑に絡み通り、道に迷うのはこの付近に慣れていないものにとつては必至のことである。

また、この辺りは大地主が多くその庭には季節に準じた様々な木々が植えられている。桜も然り、また菖蒲も然り。

そしてこの俺の家もまた馬鹿馬鹿しいことに必要以上に巨大な作りとなっている。二人暮らしで三階建ての洋式住宅はでかすぎる。この家の家長は何を考えているのやら。

がちやり。

かぎて型のドアノブは軽く少し押しただけでストンと下へ垂れた。鍵が掛かっていない。見下ろした玄関には黒色の革靴が二つきちん

と整えて揃えてある。サイズは大きい。

「…おかえり、晴人」

入り口から真つすぐのびた廊下の横側の扉を開け、顔を出す男。

父だった。厳かな黒髭に白髪混じりの頭髮、黒スーツの右胸ポケットの下では会社の安全ピンで取り付けてある社員カードが光る。

「今日は明日からの出張のため早く帰ってきたんだ、驚かせてすまないね」

俺は靴を脱ぎ家へ足を上げ、すぐに二階へ上がる階段を上ろうとした。

しかし、肩を掴みそれを阻止しようとする者が一人。

「そんなすぐに自室にこもらないで、一緒にご飯を食べないか？」

「……」

俺は黙ったまま父の冷え性の手を取り、払った。

「晴人……」

気落ちした声色を放つ父はそれ以上手を伸ばそうとしなかった。

「…晴人、何が不満なんだい？お父さんの何がいけないのかな？なんでも言ってくれ、お父さんにできることなら何でも……」

「……」

父を無視し、俺は階段を上り始める。

「そうだ、晴人！また喧嘩をしたんだって？」

俺の後ろ背にかけられた声に触発され、俺は目を細め眉を吊り上げゆつくりと顔を背後へ向けた。

「だったらなんだよ」

「そのことは気にしないでいてくれ。またお父さんがちゃんと話を付けておくから……」

「…またそれかよ。そういうのがうぜえんだよ、こついつときだけ父親ぶりやがって」

「晴人……」

階段を上りきり、父親に軽蔑を含めた冷たい視線を送った。俯いたその不様な様子を見て俺は一度鼻を鳴らし、すぐに自室の扉を開いた。

ただ、なんでもできる父親が嫌いだった。

父はテレビのスポンサーになるほど大きな乳業会社に勤めている。つい先日、父は厚い書類を俺に突き付けてきた。父は先日付けで会社の副社長に任命された。

わかりかし仕事ができる人物で人望も厚く、よく部下から飲み会の誘いを受けているようだった。

酒癖が悪いわけでもなく、女ぐせが悪いわけでもない。実によくできた人なのだ。

しかし、俺はそんな父親が嫌いだった。他人にはどこまでも優しく、俺に対しても生まれてこのかた面倒見よく接してくれた。

だが、そんな父親に突然反発したくなる時期が到来した。

自分でも不思議だった。何故か父が憎くて憎くて仕方がなくなっ

俺がどんなに悪いことをしても、すぐに父が現場へ駆け付け、俺が責任を負わなくていい方向へ導いてくれた。しかし、それが嫌だった。

どうしようもなく自分が子供に見られているような気がした。実際子供だったのであるが、当時中学一年生だった俺はそれが腹の奥で複雑に擦れてたまらなかった。

それから、俺はもう父親と真つすぐ向き合えなくなった。

それが続き、今も未だ…

——夜。

眠るも早く、十一時。

今日も父と昼から一度も会話を交わすことなく過ぎて終わった。

憤った不穏な脳内は、俺に安息の眠りを与えてくれなかった。

父親は俺の生きる上で、いつの間にか邪魔なだけの存在へと変わってしまった。

早朝の教室の不思議空間？・・・〈8：2〉

♪

翌朝。快晴。庭園掃除日和。

目覚めは自室の目覚まし時計の爆発音で眠気を吹っ飛ばし起床。
始業式翌日からの七時間授業は非常に大変な重労働である。

しかしそれに加え俺には学校の裏庭の雑草除去の課外授業がある。
誰がこの好意の行為を評価してくれるわけでもなく、それどころ不
名誉な懲罰者のレッテルまで貼られてしまう。

反抗しようと思えばできたはずだった。少し力で脅せば黙る先公
も多々在任しているし、本人達も自分の言っていることの不条理を
噛み締めているだろうし。

だが、反抗はしない。

奴が出てくる。

「はっ…クソオヤジのせいで寝不足だ…」

正門前まで来ていた俺は、一度ふぁあと気の抜けた欠伸をする。

なんといつても、時計の短針はまだ六の位置を指しているのだ。
眠くなること抗うに能わず。

とにもかくにも校舎に入らないことには一日が始まらない。

まだ辺りに黒の気配が残る早朝の学校の廊下は完全な沈黙表情で俺を睨み続ける。俺に喋るなどとも言っているかのようなだ。

まだ公務員のおじさんしかいない職員室に無言で侵入し、自クルスの教室の鍵をとる。おじさんも俺に気付いてはいる様子だったが、ちら見した後にすぐパソコンにむかいキーボードのキーを叩きだした。

職員室から出て右、真っすぐに朝焼けの廊下を進んでゆく。

ふと、廊下の窓から外を眺めてみた。

「…なんだこれ。メチャクチャ…」

キレイ

三階だったこの廊下の窓の外には、一面赤い薄透明なシート…ヴ
エールを被ったように朱色に染まり太陽を眼前で半分持ち上げている
いつもの俺の町があった。ビル群のせいで太陽の右の少しが隠れて
不恰好だが、これは今まで見たことのない景色だ。

「人工的なものをこうまで変えるなんて」

俺はただその光景に驚いているだけではなかった。

自然を排除してきたこの機械的な人工都市に、いまだに神秘の大自然
の手が及んでいるようで、凄まじい感嘆を覚えた。

そしてその大きな自然という加護の下で、殴り合い傷つけ合う人
を思う。

「俺ってポエマーだなあ」

…以上で『大自然の偉大な力を見て自分の無力さ、無慈悲さ、無
考慮さに気付いた不良高校生』の図を終了する。時間を潰したつも

りだったのだが、どうだろう。ノー。3分と経っていない。これじゃ誰もこない。サイレントモーニングの夜明けだ。

んで、話は完全にもとに戻る。俺はガラスと引き戸独特の擦れ音を奏でて教室を開門する。

しかし、おかしいことに気付く。鍵が空いている。

いやいやそんな馬鹿な。

鍵ならここ、俺の右手に握り締められている。

警備員さんが毎日戸締まりしているはずだから締め忘れということもないはず。

じゃあ誰だ？

意を決して教室へ足を踏み入れる。

「えっ？………人？」

実に細々しい声が俺の耳の渦巻官を激しく刺激。電気も点けていない教室にポツンと、出現状況からしても謎の女子生徒が制服姿で

座っていたのだ。

早朝の教室の不思議空間？・・・〈7:3〉

朝焼けの透き通りゆく教室で、彼女は机群の窓側の端の前から3列目に座り何かありえないものでも見たような表情でキョトンとする。

「あ…」

俺は不意に言葉を詰まらせた。

朱色の日の光をその幼顔の頬に受け、日を逆光として背負う彼女。黒髪は長く、の後ろで二つにくくりツインテールになっている。

無意有過の時間に囚われ、面向かう彼女から目を離せなくなった。

見とれていたといえそうかも知れない。だが、これはどちらかというと不意いや隙を突かれたために中枢神経が正常に機能せず体が硬直しているのだ、と無理解釈を自身に説いた。

要するに…俺は一瞬たりとも目の前の女子に見惚れていたなんてことは無い、と強く噛み締めたかったのだ。

よって、

「お早よう。お前早いな。いつもこんなもんか？それにしてもどう

して鍵が開いてるんだ？知らない？そうだよな。ん？ああ俺か？俺はちよつと用事があつて早朝登校なんだ。じゃ、今からその用事があるから、またな！」

ベリーファストなトークで彼女を翻弄。

「う……あ、あの、えー……あ……え……？」

見事に策中にはまつた彼女はもごもご何かを言い出そうとしながらもそれを飲み込み、を繰り返した。

「あ……あのっ！」

しかし、ついには呼び止められた。

「……何？」

「用事つて……なんなのですか？」

えらく丁寧な口調で聞くものだから、俺の方も少し姿勢を正してしまう。俺が直視していない彼女から、確かに視線を感じる。

「んーとな……」

素直に懲罰を受けた、などと恥ずかしいことを言える訳が無い。俺の世評を彼女も知っているであろう。そう、不良、ザ・バッドマンである。しかもかなり高度な。ベントの兄ちゃんとヨロシクやつてるとでも噂されるような。そんな俺が懲罰を真面目に受けているなど…どこか自分で許せない。

「もしかして…喧嘩のことでしょうか…？」

俺の唇と眉がピクつく。ああ、バレていた。経路は不明だが、口振りからして何故かバレているのだ。

「…よく分かったな。ああ、そうだよ。だから、ついてくんなよ、覗きにも、だぞ」

パシャン、と景気よく教室のドアを閉め、悪党らしくわざと肩で風を切って歩きだす。

紅い神秘の消えた教室にあの謎の黒髪女生徒をただ一人残して。

早朝の教室の不思議空間？・・・〈5：5〉

♪

ハラハラドキドキがいつぱい、夢と希望と草抜きの世界！今布団の中で憂鬱な夢にうなされている方は必見、当イベントに参加すればもうそんなことはオサラバ！集合、決行場所は双方同じく我らが高校の裏庭、花壇広場。

みなさん、お友達を具して参加してみてはいかがですか？我々はみなさんの汗と涙を応援、期待しています！

……俺はこのようなツアー企画書を事前に配っておいたのだろうか？

日が完全に昇った頃、俺は足取り重くも彼の地へ辿り着いた。

大方の予想どおりたたみ二十畳分ほどのその裏庭は腰の高さほどにまで間延びしたすすきやら、菜の草やら、なんとかやら、やらやら……とにかく人（草）口密度MAXで生い茂り、もはや庭と呼べないほどにまで荒れていた。

しかし俺がギョツとしたのはそんなことではない。その密林の中に、確かに十数人も金髪野郎やらモヒカン野郎やらタバコ野郎……etc…の軍勢が屯していたのだ。

俺は小さな箒箱入れの影に隠れ、片顔をチラリズムさせ様子を伺っている。どうやらこの学校の底辺、悪ガキどもの集団らしく、その中心には反抗的性格で有名な三年生番長格の生徒がいた。

しかしよくよく覗いてみると、彼らは何かを囲んでつつ立っているように見える。目を少し大きく見開き、草木の合間を縫って視線を走らせ、その影を確認しようとした。

ロックオン、ズームイン。

被写体画像を確認、眼球にダウンロード残り所要時間5、4、3、2……完了。

「1」…小画山っ!？」

なんとその不良集団のど真ん中に、尻を着き口をあうあうさせている我が知り合いクラスメート小画山の姿があった。

ふと不良のうちの一人が何かを口にしていることに気付いた。急いで俺は聞き耳を立てる。

「オラア！この写真バラ撒かれたくなかったらさっさと金だせよ！」

「や、やめろ！そ…その写真だけは！」

ありきたりなシチュエーションにがつかりする俺。真剣な顔で喘ぐお前。お前はお前の為に、なのに俺はお前の為。

何やら穏和な雰囲気ではない様子。もしかこれはイジメ、脅しの現場では？と俺は不謹慎にも心踊らす。

「しかしこの写真がそんなに大事か？返してやるならいくら出す？」

「くっ…。樋口…いや、福沢一人までなら出す！だから何も言わず返してくれえ！」

真剣にまずそうな雰囲気だと、俺はやつと気付いた。小画山はきつと大切な人の写真…恐らくは無くなった親御さんやら祖父母さんの写真でも奪われ金ヅルにされているんだろう。

その危険さを踏まえ、俺はさらに物陰から観察を続ける。

「見ろよこれ、笑えるぜ？」

写真を持っていた不良が、隣の不良に写真を手渡す。

「ぶつ。ありえねえ！」

「くそ、返せ！俺の大事な……大事な……」

俺は静かに固唾を飲む。何を奪われているのか、それを知るため息を潜めその場の空気となる。

「ああん？そんな大事か、こんな女が」

「綾本ちゃんを馬鹿にすんなあつ！！（プロローグ参照）」

「それがよっ！！」

不良どもが一斉に俺の方に振り向いた。即座のツツコミ、それは危険を呼び込むものだ。

早朝の教室の不思議空間？・・・〈7:3〉

「誰だデメエ！？」

人生に飢えた不良集団の視線は凄まじく、血走った眼球が俺をス
テージのスターにする。俺は今、みんなの注目の的だ。

「く、黒田！助けにきてくれたのか」

子犬が泣くような腑甲斐ない声色を発して、小画山が俺の前にハ
イハイしながら這い寄る。ふざけた感じに涙ぐむこの小動物に俺は
もはや哀れみさえ感じ、ため息と同時に肩を落とした。

「く、黒田だと！？あの二年のヤンキー番長の！？」

「だったらなんだよ」

「な、なんでここに！？」

言えないです。先生の言い付けをきちんと守り、草抜きにきたな
んて。

「へっ…邪魔な奴を掃除しにきたんだよ」

我ながら巧い。嘘を吐かずに真相を隠す、詐欺師の高等テクニク！

「お、おい！あいつ殺る気だぞ！」

「ま、まずいんじゃないか？」

「馬鹿が！こっちは十二人、向こうは二人だ！負ける訳がねえ！」

頭の中で軽いプラスチックにひびが入るような音が警鐘として鳴り響く。

「へっ、おもしれえ！やってやらあ！」

開いた右手の平に左拳骨を打ち込むパシッという効果音が景気よく鳴り響いた。

——分かっているのです。こんな風にいつも喧嘩腰でいるからみんなに不良だ不良だと連呼されることくらい。しかしです。手は自ずと事態を悪しき方向へ運んでいくのです。

はっ！

「…あ」

我に返ったとき、俺の手は絞り足りないボロ雑巾のようにけちよんけちよんにやられた三年ヤンキー番長の瀕死体の額を驚掴みにしていた。

「冴島さーん！」

「冴島がやられた！？この二年坊主、化け物か！？」

辺りを見渡すと、そこには鼻血まみれの顔を地に伏せた不良男子が数人這いつくばり、残りの連中が俺の周りを囲んでいた。

「ま、またやつちまった」

手をパツと広げると、冴島という三年不良番長が何一つ言葉を発

さず勢い良く地に伏した。

「冴島さんっ！…くそ、この野郎！」

左から迫り来る若造不良。

「後始末が面倒なのに…」

彼が振りかぶったこぶしを左手一本でいなし、右ストレートを顔面にただ一発ぶちこむ。

トラックにでも跳ねられたかのように体を捻りながら吹き飛んでゆく彼の行方を、そっと見据える。

…頼むから更正してくれよ、闇討ちを企てるものはもう定員オーバーだ。

「じゃあねえ、全員のばしてしらはつくれるという作戦をとろう」

何気なく振り上げた拳を、正面にいた怯えた表情をしている一年坊主に振り下ろす。

パシンッ！

手応えが無い。いや、弱いだとか、そういうことじゃない。殴った感触が無い。

俺の手は坊主の頭の寸分前で制止していた。何者かの手が視界外より伸びてきて、俺の手を掴んでいた。

早朝の教室の不思議空間？・・・〈8:2〉

自身の手をへばりつくように掴み放さないあまり大きくない白い手。研ぎ澄まされた俺の野性の感は瞬時に手を引いて下がれと脳に告ぐ。脳はそれを指令と認じ体中に信号を出す。

伝令どおりに身を引いた体中から何かの強張りを感じ、ぶるりと小さく身震いする。

掴まれた温かい感触は今だに手に残り、しだいに寒々とした風に誘われ消えていった。

その手を延々と見続けた俺は数秒してやっと手を掴んできた彼の方へ顔を上げた。

まず目に飛び込んできたのは、黒い雨ガッパに漆黒のサングラスという不気味不可思議な様相。そして雨ガッパの下（だいたい膝辺りだろうか）からはみ出る形で地へのびる細々とした両足。

背丈が俺より一回り小さい、現代的な風式からすると『異様』（悪く言えばダサイ）な服飾センスをした謎の人物だった。

「……………はあ？」

俺は異議を唱える。

自前のナルシスを発揮したわけじゃないが、前に言った彼の様相からして、彼はこの俺黒田晴人の極上の拳を片手で止められるほどのガタイではないのである。それに俺の鉄拳はこんな変態さんに止められる程安っぽくはない。よって、上告する。

「誰だお前？」

彼は答える気配もなく、変な格好の彼は静かに片手を上げ、ひょいひょいと頭の右斜め上方向でスナップ運動をした。

他の不良に逃げろとも言っているようだった。

事実、まだ意識を保っていた負け組はノビてしまった勝ち組を背負ってすたこらさっさと逃げ帰ってしまった。

別に俺は奴らに用事があったわけではないので、横を過ぎ行くのも許して…無視してやる。

「もう一度聞くぞ。誰だお前？」

しーん…とした沈黙感。彼は黒く光る視線で俺を睨みつけたまま黙りきった。

「ちっ…しらけちまったよ」

延々と睨み合っているのも仕方ないと思い、俺はただ静かに腰を下ろし近くに生えていた草に手を伸ばした。仕事はしっかりこないしておかないと。

が、俺が一株のタンポポの子葉を引き抜くと同時に彼が動いた。しやがみこむ俺の背後に立ち、無言ですごみを効かす。振り向き見れば、笑わない唇に、案外綺麗な頬まわり。雨ガッパのせいで眉から上は隠れて見えないが、サングラスの下まなこの眼はきつと俺を一直線に射ぬいている。

「黒田…」

初めて開いた口は、予想外に甲高く細い声だった。俺のこぶしをとめたほどの男なので、だいぶとの太い声を予想していた俺は少し不意を食らったような気分になった。

「なんだよ無視したり呼んだり…」

「覚悟」

覚悟とは。古来より使われる殺し文句の上等語。もしくは最近の若者に不足しがちな大人な理性表現の一つ。ただ一言、覚悟、で用いた場合、それはおそらく前者を差すわけで――

「んなつ!？」

手首をいきなり掴まれ、

「痛い！」

と思った次の瞬間には、俺は世界を逆さまに眺め、地に足を生やしてはいなかった。

手首をひねられただけで、俺の日本男子平均の体重を持つ体はくると回転し、投げられてしまったのだ。

り、理不尽な…っ！

などとまあ、そんな悪態の感想を説く頃には俺の体は地面に打ち付けられ、節々からやんわりとした痛みが込み上げてきていたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6738a/>

つらこど～黒～

2010年10月14日21時36分発行